

実践報告

子どもの姿から考える幼小接続の在り方
— 一年長児と小学1年生の観察を通して —

古閑 美保子*

1. 問題と目的

国内外で保幼小教育の連続性・一貫性の必要性や重要性が言われて久しい。現在、日本では5歳児の95%が幼稚園、保育所、認定こども園に通い、家庭外での幼児教育を受けている現状からも、保幼小の体系的な教育について検討されるのは当然のことであろう。

国内においては、1988年の小学校学習指導要領改訂による生活科の新設に始まり、2008年、幼稚園教育要領及び保育所保育指針の改定により、幼小接続に関して相互に留意する旨が規定されるなど、保幼小連携・接続を重視する動きが強まってきている。また、2015年には国立教育政策研究所教育課程研究センターが『スタートカリキュラム スタートブック』を作成するなど、国全体でスタートカリキュラムを推進しつつある状況である。お茶の水女子大学子ども発達教育研究センターの調査(2005)によると、各都道府県の小学校126校、幼稚園125園のうち、小学校の62.9%、幼稚園の52.4%が幼小接続連携に取り組んでいるという報告もある。筆者が所属する大学院がある佐賀市でも、全国に先駆け2006年度から接続期の教育プログラム「えがお わくわく」を導入し、最新の第7版(2015)では、「育ちと学びを生かす接続」も視野に入れた取り組みが行われている。

一方、国外においては、OECD(経済協力開発機構)が幼児教育や保育に注目している点を挙げる事ができる。OECDの報告書『OECD保育白書2017版』には、「各国は、社会的流動性を高め、あらゆる子どもが自分の能力を最大限活かす機会を得られるように、安価で質の高い早期幼児教育・保育を提供する取組を強化するべき。」と、幼児教育や保育に国が積極的に投資すべきであることが述べられている。また、「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」(2017)によれば、国際的な潮流として、OECDの「Starting Strong」において就学前教育の重要性が唱えられ、幼児教育と初等教育の強力で対等な連携の必要性など、幼小接続について言及している。このように、国内外において幼児期と児童期をつなぐ教育の重要性は認識されている。しかし、同時に次のような課題も指摘されている。

加藤・高濱ら(2011)は、「現行の幼保小連携への注目は、遊びが中心となっている幼児教育と教科教育に根ざす学校教育の間での教育内容をめぐる齟齬が、適応問題に焦点化するかたちで摩擦につながっているといえよう。」と述べ、遊び中心の生活から教科学習中心の生活へ変化する段差の問題を指摘している。また、角谷・井上(2015)は、「小学1年生の不適応の原因の一つとして、幼児教育と小学校教育との間の「段差」という概念が存在する。この概念は、保育所や幼稚園での生活習慣と小学校での生活習慣の違いに子どもが戸惑うことで、学校生活への適応が難しくなることを中心に指す。」と述べ、幼小の生活習慣の段差の問題を指摘している。

このような指摘に加え、筆者は保育者から小学校教員に対する次のような不満の声を聞いた経験もある。

- ・「子どもたちが小学校に進学すると年長として出来ていたことが、1年生になって子ども扱いされてしまっている。」
- ・「小学校側は、幼稚園や保育園で子どもたちが、ただ遊んでいると思っている。」

*佐賀大学大学院学校教育学研究科・学生

このような主張においては、白神・周東ら（2017）が、「保育所・幼稚園と小学校の環境の違いとして、保育士および幼稚園教諭と小学校教員の援助・指導における考え方や、子どもへの理解や期待の違いがあると考えられる。」と述べ、幼小の指導観の違いを指摘しているように、幼小接続の重要性が高まっている中でも未だ解消されない課題があることがわかる。

2018年度改訂の新しい幼稚園教育要領では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として10項目が示された。今後より一層、この10項目を子どもの成長の目安として保育・教育がなされていくことが期待される。しかし、これらは方向性を示すものであることや、子どもの発達には個人差があることから幼児期に留まる項目ではなく、小学校入学時にも関わる視点である。この視点の認識を生かし幼小両者で相互理解を図ることは、より良い幼小接続につながることを期待される。幼小接続カリキュラムが導入され、取り入れられることと並行し、幼児教育と小学校教育の接続・連携に関する動向も変化している。

新たな視点が導入されるなど新たな動向がみられる中、先行研究においては、幼児期から小学校教育のつながりのなかで「段差」が存在することを述べられている。極端にその「段差」を否定的に捉えるだけであったり、その段差が具体的に明確にされていなかったりする。一方、秋田（2002）が、子どもにとって「段差」はとまどいを生じることもあるが、小学校のルールを習得していく貴重な経験の場でもあり、子どもにとって乗り越えることのできないほど高い段差を滑らかにすることや、子ども自身がその段差を乗り越えていくだけの力や基礎力を培うための教育が求められているということを主張しているように、「段差」を肯定的にとらえ幼小連携に活かしていく必要性も述べられている。

保育士および幼稚園教諭と小学校教員の考え方の相違があることについて述べられるが、両者の考え方の違いのみに視点を当てている研究や、接続期の子どもの姿を具体的に観察している研究は少ない。白川・東ら（2009）が「小学1年生が入学間もない1学期当初の時期に学校生活に対してどのような適応状態にあるのか検討した研究は少ない。」と述べていることや、「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」（2017）においても「幼小接続期カリキュラムでは、分かりやすくする工夫として、実践事例や交流事例等を提示することが多い。しかし、5歳児の事例は多いが、1年生の具体的な姿や学びが提示された事例は少ない。」と述べている。

より良い幼小接続を考えていくためには、接続期の間だけの子どもの様子や、年長児、小学1年生のどちらかのみには偏った視点ではなく、長期的な子どもの成長を考慮した上で、実際の子どもの姿から幼小接続の在り方を考えていかなければいけないことが考えられる。

「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」（2010）で、平成20-23年度に幼小接続カリキュラムが作成されているのは51自治体、平成24-27年度は96自治体であり、4年間で幼小接続期カリキュラムの作成・改善に取り組んだ自治体が約2倍に増加していたことが示されたように、幼小接続期のカリキュラム開発重要性の認識は増している。福元（2014）によると、幼小接続のカリキュラム政策を概観すると、学校体系の改革を志向するアプローチ（「学校体系改革アプローチ」）と小1プロブレムの予防を目指すアプローチ（「小1プロブレム予防アプローチ」）の2つに整理できる。「幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究（報告書）（報告）」（2017）によれば、国内の幼小接続研究の動向は、最初は「小1プロブレム対策」が中心であったが、次第に「教育の接続」に重点が置かれるようになってきている。これらから、幼小接続カリキュラムの担う役割は、導入され始めた頃から次第に変容してきており、今後は、福元（2014）が分類した、「学校体系改革アプローチ」として進められていくことが考えられる。前述したように佐賀市でも、全国に先駆け平成18年度から接続期の教育プログラム「えがお わくわく」を導入している。佐賀市も「小1プロ

プレムの解消」から始まり、10年を経過した。第7版を改訂した今現在は、「育ちと学びを生かす接続」も視野に入れている。中西(2012)によると、世界的な動向として「生涯学習(life-long learning)」の観点から、幼児期の一貫した教育の学びの重要性が指摘されており、幼児期の教育とその後の学校教育との連続性・一貫性というテーマは、重要性を増しているようだ。伊藤(2017)は、今回の幼稚園教育要領の改訂は幼稚園段階のみを単体で見るのではなく、幼稚園から始まり、小学校・中学校・高等学校の教育へつながる縦の18歳までを見通した中で育むべき力は何かということ、1人の子どもの成長という視点、また見通しをしっかりとった上で、幼稚園の教育活動はどうあるべきかについて検討し、改訂を行ったということを述べている。これらのことから、幼小接続カリキュラムは、幼小接続期の5歳児と小学1年生に関わるものだけではなく、長期的な子どもの姿を見通したうえで取り組んでいかなければいけない。

以上のことから本稿では、子どもが小学校に入学し環境の変化があるなかで、どのような段差があり、子どもたちは接続期をどのように過ごしているのかということ、また、接続期における教師の働きかけをみていく。そして、幼小接続カリキュラムが、年長児と小学1年生の時期のみだけではなく、小学校6年間において効果的に機能するためにどのようなことが大切になっていくのかということを考えていくことにした。

今回、幼小接続において必要となる要素は何であるのかということ子ども姿から考えていくために、実際にX小学校とY幼稚園で、主に小学1年生と年長児の様子を観察を行うこととした。

2. 方法

X小学校で、平成28年10月から平成29年12月の期間に週1回程度の実習を行う。その中で、実際に児童と関わりながら、児童の様子を観察していく。特に平成29年4月からは、児童が入学し、環境が変化した中でどのように学校生活に適応していくのか、他者との関わり様子はどのようなか等、学校での様子を見ていくことができる。

Y幼稚園では、観察実習を行う。幼児期(特に年長児)が幼稚園生活のなかでどのような遊びを展開しているのかをみていくために、平成29年5月から7月にかけて、週1回合計10日間(1日2時間程度)の観察を行う。対象は年長児計30名、観察を行った時間は朝9時30分からで、子どもが登園してから自由遊びの時間である。

今回観察を行うX小学校とY幼稚園は隣接しており、X小学校の児童は、休み時間にY幼稚園に入ることができる。積極的に子どもの交流を行っている様子からも、両者は幼小連携・接続には積極的である。ここで、子どもの遊びを中心とした保育の観察と、小学校での1日の児童の様子を観察から子どもの「段差」を捉えていきたいとした。また子どもの様子だけではなく、保育者が年長児にどのような関わりを行っているのか、小学校においては教師が複数の園から入学してきた児童とどのように関わりを図っているのかということについても例を挙げる。

3. 幼小における子どもの学びの様子

3-1. 幼稚園観察実習からみる幼児期の遊びと教師の働きかけ

まず、はじめに「自由保育」について言及する。富崎(1979)は、「自由遊びを中心とした保育形態を、設定保育(一斉保育)に対して、自由保育と考える。」としている。飛田(2015)は、幼稚園教育の中にある保育の分け方のひとつとして課題保育(一斉保育)と自由保育(自由遊び)という考え方があり、自由保育というのは子どもたちが自由に遊んでよい時間と考えられており教員から特

に指導されることのない時間であるが、しかしながら放任ではないということ、課題保育とは、教員が遊びの内容を考え決められた時間教員が主体的に指導し、原則としてクラス全員が教員の立てた指導案に添って遊ぶことと考えられている、ということ述べている。先行研究によれば、おおよそ、「自由保育」は、子どもたちが教師に指示されることなく自由に、「一斉保育」は教師主導であり、幼児教育においてはこの自由か一斉かということで二極化している。浅川（2009）は、この一般に自由保育が子どもの興味や意欲を大切に、個人を尊重し、家庭を重視するという「子ども中心」であり、一斉保育は、保育者が積極的に働きかけ、集団志向であり、結果を重視するという「保育者中心」であるといわれており、さらに、子どもの主体性を大切にしている自由保育は良く、保育者主導の一斉保育は良くないという印象があるというような保育を二分した考え方について言及している。それは、近年子どもと保育者が共に主体性を発揮している「主体—主体」の関係が大切であると主張されるようになる、ということと、研究の結果、自由保育と一斉保育どちらも子どもが主体性を発揮していることが示された、ということである。これらの観点は、幼小接続について考えていく際にも、必要な要素であると考えられる。これらを踏まえ、子どもの遊びの様子だけでなく、保育者の働きかけも自由保育においては重要な役割であるとし、保育者と子どもの関わりの様子もみていくこととした。

表1 幼稚園の1日の流れ

<p>【幼稚園の一日の流れ】</p> <p>8時30分 登園開始</p> <p>○午前の保育 「主体的な遊び」</p> <p>○弁当・給食</p> <p>○午後の保育</p> <p>13時40分 降園（年少）</p> <p>13時50分 降園（年中）</p> <p>14時00分 降園（年長）</p> <p>（降園後預かり保育開始）</p>
--

今回の観察実習は、午前中の自由遊びの時間を中心に実施した。子どもは登園するとそれぞれ、「連絡帳の今日の日付の欄にシールを貼る」「指定の場所に提出する」「鞆や水筒、タオル等自分の荷物を決められた場所に片付ける」ということを行っていた。準備が終わると子どもはすぐに、11時頃まで自由遊びの時間となる。1人で遊ぶ、少人数で遊ぶ、誰と遊ぶ等、遊びの形態は様々で、またどのような遊びをするのかも子どもの意思が尊重されていた。これは、先に挙げた先行研究（浅川，2009）と同じであるといえる。

具体的には、子どもの遊びの時間では、同じ遊びを常に継続する子どももいれば、積木や折り紙を折る、ペットボ

トルや空き箱を使って車を作る、空き箱や画用紙で鞆を作るといったような制作、園庭でサッカーをする、鉄棒をするといったような運動等、様々な遊びを転々とする子どももいた。子どもが違う遊びに転換しても保育者は子どもの主体性を尊重している。また玩具や制作で使った道具が片付けられていない場合も、子どもが保育室に戻って来た時に「〇〇さんのはさみが使ったままになっており、大変だ」といったような声掛けや、片付けを積極的に行う園児を称賛し、正の強化を積極的に取り入れながら子どもが基本的な生活習慣を身に付けていけるような働きかけがあった。

観察を通して、自由に遊ぶことができる環境が保障されている中で子どもは、5領域「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の中であげられる様々な力を同時に培っていることが分かった。小学校が基本的に教科に分かれ教育が進められていくのに対し、幼児教育は、領域ごとに見方や考え方を出していない。実際に観察の中で子どもの遊びの様子をみていると、遊びの中には子どもは様々な力を身に付けている様子がみられた。子どもの興味関心のある物事に、教師の働きかけが加わることで、幼児期に必要な能力を培うことができると考える。幼児期に遊びを中心とした教育がなされるのは、遊びが子どもの発達段階や実態に即しているからである。幼児の自発的な活動としての遊びを通して、保育者が総合的な指導を行うことで、5領域の全ての領域で育てていきたい力を偏ることがないよう

にしていくことができ、子どもの興味・関心を大切にすることが、その後の子どもの更なる学習への意欲を強化するものであり、小学校以降の学びの基礎力となっていくと考える。

具体的に分析していくために観察でみられた事例を挙げ、その中での子どもの遊びと教師の働きかけを考えていく。

年長児の観察から、子どもが遊びのなかで身体能力や創造力を培うことができていることや、遊びの中で自己表現を行っていること、他者との関わりがあること、がみられた。また同時に、常にその遊びには教師の働きかけがあることも分かった。

たとえば、事例①（表2参照）では、子どもが毎日駒づくりを続けていくことができるように、その遊びで使えるような用具を、子どもの遊びの状況に合わせて準備しているという働きかけがある。事例②（表3参照）では、子どもがソーラン節を踊ることができるように、音源を用意すること

表2 事例①「こま遊び」

筆者が初めて幼稚園に参観した日から、子どもたちはペットボトルのキャップと爪楊枝で作った「駒」を持っていた。外で遊んでいた男児1名が保育室に戻ってきて、自分の棚に保管していた駒を手に取り、さらに新しい駒を作り始める。徐々に他の男児も保育室に戻り、駒づくりを始める。観察日4日目、男児5～6人で自分たちの作った駒で対戦を行っていた。この駒作りは、子どもたちの中で流行している玩具から影響を受けたものだと考えられる。子どもたちは、興味を持ったものを身の回りの道具を使って制作している。しかし、これは単なる制作の技能だけが養われるのではないと感じた。

まず、工夫を凝らすなど造形的な技能の面において、創造性が養うことができているという点がある。ペットボトルキャップを1個から2個に重ねてみたり、厚紙を重ねてみたり、色を塗ってみたりと何度も繰り返していくなかで変化がみられた。そして、他者との関わりがあるということである。ただ作るだけではなく、他者の作った物をみながら、模倣する、他者との違いを出すような工夫を凝らしていた。

また競争をするなかでルールがあるなかで遊びながら、勝ち負けを経験している。非常に驚いたのは、観察を行った3ヵ月間ずっとその遊びが続いていたことである。園の先生に聞くと4月からその遊びは行われていたということである。

表3 事例②「ソーラン節」

5月にX小学校で運動会の行事があり、そこでX小学校の低学年はソーラン節を踊った。X小学校に兄がいる男児Aは、兄の影響からソーラン節の踊りを知った。その為、A児は6月に観察に行った際にソーラン節をよく踊っていた。自分でカセットテープを操作し、約1時間踊っていた。ここで興味深いのは、1人で踊ることもあれば、何度も踊っている際に、周囲の子どもたちがその都度参加していたことである。ソーラン節を踊ることにより、身体を動かすこと、音楽に合わせて表現すること、他者と交流することなどの様々な要素があると考えられる。

その後11月には、X小学校での行事に例年通り年長児が参加し、皆でソーラン節を発表していた。このことから、教師の働きかけがあることが予想される。

だけでなく、1人の子どもの遊びから、周囲の子どもまで活動を広げる働きかけがある。

この他にも、保育室の環境も意図的になされているものがあつた。たとえば、時計に関する絵本を子どもの視界に入る場に配置することで、子どもがそれを「作りたい。」と思うことができるような間接的な働きかけである。視力検査がある前には、子どもがメガネをモールで作ったり、「視力検査ごっこ」を遊んだりしている様子があり、そこから「○○さんたちが視力検査をやったんだけど、みんな今度視力検査があるよね。どうやってするか知ってる？」という声掛けから始め、視力検査の方法の確認へとつなげていた。子どもの遊びの中から、全ての物事につなげていく教師の働きかけの重要性を感じた。子どもの遊びは自発的で自由に遊ばれ、なんらかの目的があつてなされるのではなく、遊ぶこと自体が楽しいからなされる（原子，2016）。子どもは遊びに夢中になりながら、自分の心身の能力や態度を無意識のうちに発達させることができる。そのためには、保育者の働きかけが必要であり、小学校以降に必要な基礎を偏りなく培っていくことは保育者の専門性に関係する点であると考え。今回の観察では、工藤（2016）が「モノや人と存分にかかわることの出来る時間や空間の保障，1つ1つの遊びが関連づくような配慮，1人の遊びが周囲の幼児に広がるような保育者の援助が必要であり，遊びの充実には保育者の援助は大変重要である」という主張と一致する，保育者の子どもへの関わりがみられた。子どもの自由遊びの中には，子どもが自由に遊びを繰り返すだけでなく，保育者の意図的な働きかけがあり，そこで子どもは遊びながら力を培っていくことができる環境があつた。

子どもの遊びの様子では，保育室内の玩具を始め，ままごと遊びで草花を使うなど，積極的にモノや自然に関わる様子が見られた。遊びにおいて，物的環境が関係していたことと共に，遊びを進展させていくことや，遊びを継続するためには，人との関わりが必要な要素であることも挙げられる。しかし，今回の観察では小グループのメンバーがおおよそ固定化されていたり，学級全体で遊ぶためには保育者の働きかけが必要であつたりする様子から，子ども同士の交流には保育者の存在は必要不可欠であると考え。

今回の，年長児の遊びの観察を通して，様々な形態で自由に遊びが展開されることや，遊びでは保育者の働きかけにより必要な力が相互的に培われていることが分かった。このことを踏まえた上で小学校生活科をはじめとした授業づくりを行うことは，幼児期と児童期におけるそれぞれの教育の特性を考慮した上で，幼小接続カリキュラムの実践につなげることができると考える。

3-2. 小学校における子どもの様子

3-2-1. 小学校第1学年の児童の様子からみる幼小接続

「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」（2010）では、「学びの基礎力の育成を図るため，幼児期（特に幼児期の終わり）から児童期（低学年）にかけての教育においては，「三つの自立」（学びの自立，生活上の自立，精神的な自立）を養うことが必要である」と述べられている。

このことを参考にし，今回の小学校実習では，「生活習慣等」「学びの様子」「他者とかわる様子」の3つの視点を持ちながら児童の観察を行った。

表4 3つの視点による児童の観察

<p>(生) 生活習慣等, (学) 学びの様子, (他) 他者とかかわる様子, (教) 教師の働きかけ</p>
<p>4月 (主な行事: 入学式)</p> <p>(生)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝と帰りの準備に時間がかかる。 ・入学後すぐから, 自分の席や棚の認識ができています。 ・自分で着替えができるが, 時間には余裕をもっておく必要がある。 ・休み時間は教室の中で過ごす児童が多い。 <p>(学)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業と休み時間の区別の認識がついていない様子。 ・字を書く能力の個人差がある。 ・粘土遊びや色塗りの時間に, 集中して取り組んでいる。 <p>(他)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師と挨拶を交わすことができる。 ・6年生との交流の中で, 朝の準備や, 給食, 掃除のルールを学んでいる。 ・活動に不安を抱く際には, 周りの大人を頼ることができる。 <p>(教)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝と帰りの会の時間に絵本の読み聞かせを積極的に取り入れる。 ・のりの付け方, 制服の片付け等, その都度説明を行いながら活動を進める。
<p>5月 (主な行事: 遠足, 運動会)</p> <p>(生)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝の準備の流れ (提出物の方法) も定着してきている。 ・休み時間のルールを理解できている。 <p>(学)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業のルールがわかる。 ・新しい内容に積極的に取り組む。 <p>(他)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達との交流が増え, 「Aさんが叩いてきた」というような問題も増える。 ・運動会に向けて練習が行われる中で, 集団行動にまとまりがみられるようになる。 ・教師に褒めることを進んで行おうとする様子がある。 <p>(教)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運動会では, 学校全体での活動が多いため, 着替えなどの準備は早めに行われる。 ・各教科でノート取り扱いや音読, 漢字・計算スキル等, 進め方の指導が丁寧に行われる。 ・着替え, 移動においては, 柔軟な時間設定を行い, 余裕を持って行動できるようにする。

6月（主な行事：プール開き）

（生）

- ・行動が全体に比べて遅い児童，上靴を履かない児童，が固定されてくる。
- ・学校生活に慣れ，授業と休み時間の区別がついているように感じられる。

（学）

- ・2人から4人のグループでの活動が増える。
- ・分からない，やりたくない，集中力が続かない時など，正しい姿勢が保てない。

（他）

- ・休み時間に遊ぶグループのメンバーが，おおよそいつも同じである。

（教）

- ・45分の授業に柔軟に対応し，児童の様子に合わせてながら授業を進めている。
- ・伝言ゲームやじゃんけん列車，歌等，児童が楽しむことができる活動を多く取りいれている。

7月（主な行事：終業式）

（生）

- ・食事，排せつに大きな問題はみられない。
- ・給食では，時間内に食べられない児童が多い。
- ・学級全体にむけて，挨拶をすることができる。

（学）

- ・自分の言葉で，気付きを述べることができる。
- ・授業の中のルールを守り，学習することができる。
- ・新しい学習内容に積極的に取り組むことができる。
- ・指を使い，自分で足し算の計算をする様子がみられる。

（他）

- ・縦割り班の中で，所属感を持つことができているように感じる。
- ・休み時間には，教室で遊ぶ児童が少なく，行動範囲が広がった。

（教）

- ・学習の最後には，振り返りの時間をもうけている。

4月には、「朝登校してからの荷物の準備や下校前の荷物の準備に時間がかかる」「着替えには余裕をもって時間をとらなければいけない」などの「生活習慣等」における課題が多く挙げられ，筆者自身も児童と関わる中で，できる限り早く準備を終わらせるような声掛けが多かった。角谷・井上(2015)の研究で特に5月までは，児童も教師も生活科を中心とし，各教科においても学習内容よりはむしろ，学習習慣，学校生活習慣に関わる部分への注意が払われることが示された点と一致するのではないだろうか。しかし，1学期の終盤には，4月に筆者が気になっていた「生活習慣等」の問題は減少し，反対に授業も進み始めたこともあり「足し算や引き算の計算」「ひらがななどの文字」に対する課題点が増加した。たとえば，国語の授業ではひらがな，算数の授業では数字を書くことが求められるようになる。児童は，大半は教師の指示に従い書き始める。中には，今何をする時間であるのか認識できていない様子の児童がいる。この様子は，小学1年生だけではなく，他学年の児童においても同じ状況があった。幼児教育の中では，遊びが自発的なもので，いつ始まっても，いつ終わってもよい自由なものであるため（浅見，2009），やりたいと思ったことを自分がやりたい時に活動できる，書きたい

と思った時に書けるということが保障されている。小学校教育においては、授業があり、その授業の流れに児童は従っていかなければならない。極端に述べると、児童がやりたくないと思ったことでも、その授業は教師の指示に合わない行動、たとえば離席や私語等を行うと叱責の対象となり得る。この点は、やはり、幼児教育と小学校教育の段差であるのではないかとと言える。

児童の様子と教師の児童への関わりの観察の中で、児童と教師の関係性は、接続期の段差を滑らかにすることや、児童が学校生活に適応していくために大きな役割を担っていると感じた。

入学時から、児童の教師に対する信頼感が高いのではないかと考える。ここでの信頼感は、小学校入学前における大人との関わりが大きく影響すると考えられる。新しい環境に変化した中で、教師が何を自分たちに与えてくれるのかという期待感を持ちながら授業に参加していくことは、今後6年間小学校生活を送っていく上で非常に重要な役割を示すのではないかと考える。

保育者と教師の子どもへの働きかけには共通点があった。幼稚園においても、小学校においても、子どもが「やりたい」と思うことができるような働きかけを大切にしていた。幼児教育に比べると、小学校での授業は教師主導に捉えられることがあるが、教師は必ず児童が興味関心をもつことができるような働きかけを行っていた。環境を通しての働きかけも行われており、たとえばひらがなを学習していく時には、教室に掲示してある児童の名前の一覧表を使用したり、習った文字に丸をつけていたり、国語では、物語中の登場人物になりきれるよう、実際にみんなで演じることを取り入れるなど、身体を使って楽しく学習できるような働きかけはどの授業においてもみられた。活動に積極的ではない児童がいた場合には、教師は必ず児童の気持ちに寄り添うようにしていた。児童に寄り添いながら、児童が活動に積極的ではない背景を考慮した上で対応しているようであった。授業づくりにおいて、児童の実態から構成していくことは重要である。授業は、教師が一方的に児童に与えているのではなく、児童の身近な内容や、児童の実態から構成されていく点は、幼児教育と重なると考える。

このように1学期の観察を通して、児童は、学校の授業や新しい友達に慣れるまでに時間はあまり要さず順応性があるように見えるが、教師の個々に対する丁寧な見取りは学校適応のために必要であり、また授業を受ける態度や話をきくための注意力などは毎日の指導の積み重ねが必要であるようだった。入学後、1学期の前半は、学校の決まりや生活面について細かく指導がなされるが、すぐに各教科等の授業が始まる。授業を進める中で、書くことや計算する力などをみていくと同時に、授業を受ける時の話の聞き方、学校生活におけるきまり等をその都度指導していくことが必要であり、それは毎日継続していく中で培われていくことであると考えられる。

3-2-2. 児童の実態を踏まえた教師の配慮

佐賀市のスタートカリキュラムでは、幼児教育の成果を生かした指導内容と指導方法を検討し、

- ① 「集まる場」を組み込んだ学習形態
- ② 「遊びの要素」を取り入れた学習活動
- ③ 「基本的な学習習慣」を組み込んだ学習内容
- ④ 「柔軟な学習時間」の設定
- ⑤ 「ユニバーサルデザイン」の学習環境

の5つの柱をもとに構成されている。入学期の4、5月は、このスタートカリキュラムを基盤とすることで、どの学級においても統一のある学校生活を始めることができていた。特に、授業時間を15分と30分に区切り、モジュールによる柔軟なスタイルを取り入れる「柔軟な学習時間」の設定により、休み時間にとらわれずに着替えや次の授業の準備を行うことができ、授業も集中して取り組むことがで

きていた。朝の会と帰りの会の時間には、「集まる場」を教室の取り入れながら教師による絵本の読み聞かせが積極的に行われていた。児童はこのような教師の働きかけにより、日々学校生活に慣れることができるようになっていた。

これらの取り組みは、接続期である4・5月に留まるものでなかった。たとえば、「集まる場」を設定し、絵本の読み聞かせを行うことでは、その絵本の読み聞かせの時間は、児童にとって落ち着いて話を聞くことができる時間であったり、帰りの準備が遅い児童は絵本を聞きたいから、早く準備を終わらせたいという意識が働いていたり、絵本が終わるまでには準備を終わらせなければいけないというような様子がみられた。そこから、次第に、「集まる場」ではなく自分の席で絵本の読み聞かせを行うようになっていった。「柔軟な学習時間」の設定も、児童の実態に合わせながら、徐々に45分の授業展開に慣れることができるような教師の配慮が接続期以降も見られた。

スタートカリキュラムには書かれていないが、教師は週替わりで順々に変わる当番のグループを「青・赤・黄レンジャー」と分けていることや、毎朝提出する宿題や連絡帳のケースを色分けして配置していたり、また休み時間は何時までなのか、何時から次の授業が始まるのかというような時間の確認が必要な場合には、時計のカードを前に掲示したりしておく等の工夫がみられた。これらから、教師が児童の実態を把握し、状況に合わせてながら児童の学校生活や授業への環境を整えていることがわかる。

3-2-3. 小学校6年間での学びの連続性

スタートカリキュラムにおいて必要とされている項目は、他学年の観察をする中で接続期以降も必要であると考えられる。とくに、5つの柱で挙げられている②「遊びの要素」を取り入れた学習活動、③「基本的な学習習慣」を組み込んだ学習内容、⑤「ユニバーサルデザイン」の学習環境は学級経営や授業を進めるにあたり共通する点がみられた。ユニバーサルデザインの学習環境や基本的な学習習慣は小学校のどの学年においても活用でき、それは、児童の学びを保障していくうえで重要な役割を果たしていると感じた。実際に教師が行っている児童への働きかけは、どの学年において共通する点が数多くある。その中で、幼小接続カリキュラムを再度見直してみると、現在佐賀市で実践されている取り組みは、予防的なアプローチに強く働き掛ける部分と、学校改革アプローチに強く働き掛ける部分に区別することができる。接続期という時期の中でもさらに、段階的に取り組みを組み立てていく必要があるようだ。さらに、小学校でアプローチカリキュラムを実践していく際には、小学校6年間の学びを踏まえた上で実践していくことが求められるべきである。

3-3. 同じ教材における5歳児と小学1年生の様子

X小学校とY幼稚園のすぐそばにある公園で、小学校1学年が生活科の授業を、年長児がクラス全員で「蟬取りにいこう。」と公園で活動を行っていた。両者とも、同じ場所で、自然と触れ合う活動であるため、子どもの行動の範囲や自然との関わり方や、教師の子どもへの働きかけ方をみていくために、観察を行った。

3-3-1. 年長児の観察 : 「公園で蝉採り」

7月19日、天気は晴れ、観察時間は午前9時30分から10時頃、対象は年長児計30名である。

表5 年長児の公園での様子

子どもたちは、幼稚園に隣接している公園へ、蝉を採りに行くことになった。幼稚園の園庭に2列に並び公園まで歩いて行った。引率の教師は計4名(担任1名, 他3名)であった。公園に到着すると、さっそく蝉(虫)取りが開始される。園児は、おおまかに3つのグループに分かれていた。それぞれ3つのグループの行動は、保育者の動きにあわせて動いていた。時折、トンボを捕まえることに集中し個人、または少人数で行動する子どももいたが、おおむね個人よりも集団で動いている印象であった。

子どもたちは、地面に覆い茂る草をじっと観察し、跳びはねる虫がいないかどうかを探していたり、聞こえてくる蝉の鳴く音をたよりに蝉がどこにいるのかわかるかどうか探していたり、トンボを捕まえていた。

公園での、教師の子どもとの関わりは、子どもたちと行動を共にし、1つのグループの一員として観察を行っているという印象であった。公園で虫や植物を見つける園児の側で、「Bちゃん何をみつけたの?」「こんなところにバッタがいるんだね。」「みんなみて! Cちゃんがトンボを見つけたんだって」などの声掛けを行っていた。

3-3-2. 小学1年生の観察 : 生活科「夏をみつけよう」

7月19日、天気は晴れ、観察時間は3校時目の10時30分から11時15分である。

表6 小学1年生の公園での様子

1年(27名)、小学校に隣接する公園で、「夏をみつける」活動を行った。この活動は、同様に春にも行われている。児童は、探検ブック・筆記用具・付箋紙(約7cm正方形)を1人4枚持参していた。付箋紙は2色×2枚であり、片方は植物、もう片方は虫(昆虫)を記録するように事前に教師から伝えられていた。

児童は、公園に到着し観察開始の声がかけられると、公園全体に散らばっていった。児童は、少人数で活動を行っていた。個人で公園の敷地内を観察して回る児童や、2人から4人の少人数で行動していた。特に、2・3人のグループが多かった。児童が見つけた「夏」には、バッタやトンボ、蝉の昆虫や、ところどころに生息している花であった。

教師は、観察する児童を順番に見て回り、付箋紙に絵や気づきを書いていない児童には、児童がすすんで書けるような声掛けを行っていた。

教室に戻ると、児童は記録した付箋紙をもとにどのような夏を発見できたのか発表を行う。それぞれの付箋紙はグループ分けした上で一つの広用紙にまとめられ、掲示された。

3-3-3. 5歳児と小学1年生の様子

まず、子どもの行動の仕方に違いがみられた。年長児は保育者を起点としたグループとともに行動していた。そのため、年長児同士の交流の中心には保育者が存在していた。「Cちゃんがトンボを見つけた」という呼びかけに反応して、Cちゃんの発見を皆で共有していた。一方で小学1年生は、教師の下を離れ、児童同士で観察を共有していた。教師が自分たちの側に来ると、「先生みてー!(バッタを手に持ちながら)」と伝えてくる様子もあった。これは発達段階による違いといえるのではないだろうか。

次に、小学1年生の記録の様子からみる違いである。文字は小学1年生の国語で、ひらがな、カタカナ、漢字の順に学習する。授業が進むにつれ、どの授業においても文字を書く作業が幼児期に比べ多かった。児童は今回の生活科でも、絵もしくは文字での記録が必要であった。年長児が、「蝉をとりに行くぞ!」という遊びを通して自然との関わり、また友達との交流を行うよさがあるが、小学1年生が、付箋紙に記録をとりその場で共有し、教室に戻ってから振り返りを行うことにもよさがあると感じた。学級で1枚の広用紙にまとめていることを生かし、今回の「夏」だけではなく、「春」の時期にまとめた動植物の記録と、今後行う「秋・冬」との比較を行うことができる。

幼児期に、子どもたちが遊びを通して経験し身に付けている力は、小学校のどの教科にもつながっていると感じた。また、それらは連続しており、様々な情報をつなぎあわせたり、知識が積み重なっていったりする。その中で教師は、どのような植物や昆虫がいるのか、季節による花の様子の違いはどうであるか、というような身の回りのレベルから、学年が上がるにつれて一般的な知識へとつなげていかなければならない。子どもたちの状態に合わせた働きかけを行うことで、子どもたちが興味や関心を持ってから活動を進めることができると感じた。

3-4. 音楽科の授業実践から考える幼小接続

権藤（2015）は、「幼児期の遊びの中にある音楽的な表現の萌芽を小学校低学年の音楽学習へと連続性をもって発展させることで、幼稚園と小学校の連携がはかれる。」と指摘している。現在小学校における幼小連携・接続では、「生活科」が中心として進められている。平成20年度版生活科学習指導要領の「生活科の内容」の(6)では、「身近な自然を利用したり、身近にある者を使ったりなどして、遊びや遊びに使うものを工夫してつくり、その面白さや自然の不思議さに気付き、みんなで遊びを楽しむことができるようにする。」というように「遊び」を取り入れることが明記されている。加納（2017）は、平成28年8月に出された「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）」で示された「自立心」や「思考の芽生え」などの「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目を、スタートカリキュラムを通じて、各教科の特質に応じた学びにつなぐ項目として、生活科が最も色濃く示されており、その中心的な役割を担っていると述べている。確かに、幼児期の遊びで子どもたちが培っている能力を、それぞれ各教科に分類することはできない。しかし、文部科学省初等中等教育局教育課程課が課題として挙げているようにスタートカリキュラムが、生活科固有の課題としてではなく、教育課程全体を視野に入れた取り組みとすることも必要である。他教科においても幼児教育と連続性のある教育を進めていかなければならない。このように幼小接続カリキュラムでは「生活科」の授業を積極的に活用しているが、他教科でも幼小接続を図っていかなければならないことを踏まえ、今回は音楽科の音楽づくりの授業を実践し、そこから幼小連携・接続に必要な点を考えていくことにした。「小学校学習指導要領解説 生活編」の「第4章指導計画の作成と内容の取扱い」の(3)において「生活科の学習は、教科の特性上、国語科、音楽科、図画工作科、など他教科との関連が深い」と示され、幼小接続において主要とされる生活科との関連性が深いということも今回音楽科を取り扱った理由の1つである。

今回の授業で実践する創造的音楽学習（音楽づくり）の特徴は、①音素材として楽器の普通の音だけではなく、身の回りのすべての音を素材としていること。②音楽を作る過程で即興（グループによる即興）が大きな役割をしめること。③幅広い音楽技法をもとにしていること。④子ども主体の活動であること。⑤グループで音楽をつくることを基本とするため、互いにコミュニケーションを取り合いながらの音楽活動であること。以上5点である。音楽づくりのよさは、子ども主体の活動であると

考える（坪能 2012）。これらの特徴より、遊びの要素が含まれることや、子ども主体の活動を重視していることは、幼小接続カリキュラムの特徴と重なる。また、音楽づくりの活動は、幼児期教育と小学校教育の両方で取り入れることができる活動であるという点も、今回この題材を実施した理由の一つである。

授業の概要

題 材 名 : 「ことばでリズム」(音楽づくり)

対 象 : 小学1年生3学級(26名, 26名, 27名)

実 施 月 : 7月中旬

題材の目標 : 拍の流れに合わせ言葉とリズムを組み合わせる面白さを感じ取り, 他者とつなげることが楽しむことができる。

前次までの教材では, ♩(四分音符)と♪(八分音符)を組み合わせたリズムを音楽に合わせて『ぶんぶんぶん』や『しろくまのジェンカ』の音楽に合わせて拍を感じ取り打つ活動を行っていた。本題材では, 習得したリズムを使い, 言葉にリズムをあわせ, 「反復」や「問いと答え」の技法を用いて音楽づくりを行った。またその技法を生かして, 作ったリズムをペアで組み合わせる音楽づくりを行った。

表7 題材指導計画

<p>1時間目目標 : 拍の流れを感じ取りながら, 言葉でリズム遊びをする。</p> <p>め あ て : 「ことばをつかっけりずむをつくろう。」</p> <p>主 な 活 動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リズムに合う言葉を選び, 4拍のリズムを打つ。 ・「反復」「問いと答え」の技法を学ぶ ・発表を行い, 他者のリズムを模倣する
<p>2時間目目標 : 拍の流れを感じ取りながら, 友達と言葉でリズム遊びをする。</p> <p>め あ て : 「りずむをつかっけともだちとつなげよう。」</p> <p>主 な 活 動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前時の内容をふりかえり, リズムリレーを行う。 ・友達とリズムをつなげて, リズム遊びを行う。(2人組) ・発表を行い, 全体でリズム遊びを行う。

今回授業を進めるにあたって, 児童が音楽科の授業に主体的に取り組むことができるよう以下の3点を配慮した。

① 見通しを持って取り組むことができるようにするための板書

黒板の左上に掲示を行い, 授業の最初に全体で確認を行った。活動の流れを箇条書きした表(図1参照)に, 「→」の図を付け加えることで, 今何を行っているのかということを確認できるようにした。何をやるのか忘れてしまう児童がいるため, そのような児童にとっては自分で確認

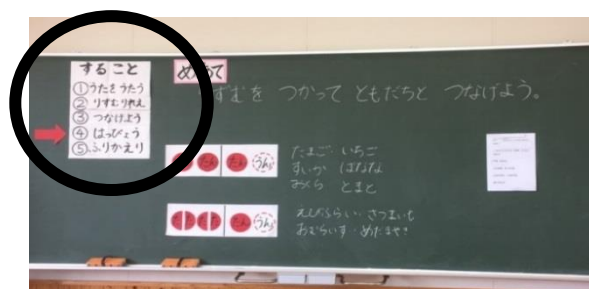


図1 板書の様子

することが出来るため有効であると考え。

② 環境設定について

B 学級では、机を教室後方に移動させ、黒板の周辺に椅子を並べ授業を行った（図 2 参照）。しかし、各作業があるため、今回の授業においては不適切であったと考える。2 時間目では、横 5 列×縦 5 列の座席で授業を行った。1 時間目の時と比べ、「聞くこと」「書くこと」「リズムを打つこと」の活動を円滑に取り組みやすくなった。

C 学級では、3 人もしくは 4 人組の班がそれぞれ机を向き合わせ、9 つの班が教室内にある状態の座席配置である（図 3 参照）。今回の授業では、個人と 2 人組の活動が中心となるため、友達との活動を行う時に児童が戸惑う面もあった。他の授業の班で話し合う様子は、3 人のうち 2 人が会話をを行い、1 人が傍観する、3 人がそれぞれ他者の書いたものを見ることにとどまることがある。そのため、今回の活動では 2 人組での活動を中心とした。



図 2 学習形態の例①



図 3 学習形態の例②

③ 活動の前に、「例」を示す。

言葉だけの説明では、伝わらないことが多かった。そのため、活動に入る前には何を今から行うのかということを実際に数名の児童に実践してもらい、例を示したうえで、それぞれ活動に入るということを行った。良かった点は、どのように活動をすすめるのか理解したうえで実践にはいるため、何をするのか戸惑う児童が減少したことである。今後の改善点は、今回の限られた時間内での活動では、発展性がみられず、多くの児童が模倣にとどまってしまったことである。今回のような活動を繰り返したうえで、自分自身の音楽をつくっていく過程を経験させ、音楽づくりを楽しむことができるようにしていきたい。

4. 考察

子どもが小学校に入学してから環境の変化がある中で、どのような段差があるのかという点については、まず、幼児期から小学校教育のつながりのなかでみられる子どもにとっての「段差」には、「時間」があった。幼児期の教育は遊びを中心とし小学校教育は教科中心であるため、小学校においては、時間割に沿って児童の学校生活が進められていく。入学時の児童の、朝の準備や着替えの様子、休み時間の過ごし方をみていると、決められた時間内にできていないことが多かった。できない理由には、興味関心があることにすぐに惹きつけられ準備することを忘れてしまうことが多い。このような課題があるため、幼小接続プログラムは効果的であることも同時に実感した。柔軟な時間設定をすることで、子どもの発達段階等による課題にも対応していくことができていた。1 学期中、時間の設定の方法を教師は工夫していくことで、子どもも自然と決められた時間に合わせながら行動し、学校での基本的な生活習慣を身に付けていくことができていた。

幼小接続を考えていく際に幼児教育と小学校教育の段差に目が向けられる中で、両者の共通点も、

より良い接続を図っていくためには見ていかなければならない。今回は観察や授業実践を通して、違いや共通点をみていくことができた。まず、「教師の働きかけ方」についてである。幼稚園では、子どもが遊びを楽しみながらその遊びを継続し、遊びから様々な事を探求していくためには、保育者の働きかけ方が重要であることを感じた。小学校では、児童が、興味を持つことができるような導入を行い、めあてを提示する。児童の身近な話題であったり、生活に関わる内容を取り入れたりすることで、実際に児童が具体物操作を行いながら学習できるようにすることで、学習意欲を高めることができる。授業を実践してみると、児童の興味関心をもてる内容や、活動の流れを構成していかなければ、授業が成り立たないことを実感した。また同じ内容の授業を3学級で実施したが、学級により児童の雰囲気や学習形態も異なることから、毎回の授業では、座席の配置から見直したり、取り入れる活動の内容を変更したり、ワークシートが児童の実態に合っているか等工夫を行った。その結果、学習形態を活動に応じて変化させることで、学級全体でリズムをつなげる楽しさを実感する様子がみられた。またワークシートを用いることで、活動の流れを活動中確認できる良さがあったが、文字を書くことに十分な時間が必要になること、音楽づくりでは即興が重要な役割を担う中、即興を楽しむ過程が十分にとれなかった様子が挙げられた。これらのように授業を進めていく上では、児童の実態を把握していくことは重要である。これは、小学校第1学年のみならず、どの学年においても必要である。スタートカリキュラム時期に必要とされる要素は、小学校6年間どの時期においても必要であるのではないかと授業実践を通して感じた。

入学式から子どもの様子をみていく中で、個別にみていくと、朝登校してから泣いている児童や、登校する時間が遅い児童は数名いるが、全体的に入学式から児童は学校に不信感を抱いている様子は見られなかった。「トイレに行ってもいいかどうか」、「忘れ物をしてしまった」など困った時に尋ねるなど、周囲の大人に頼ることができるというのは、学校生活の中でとても必要な力であると考え。その力を養うためのスタート地点は、入学してからではなく、今回の観察においても幼児期から培われたものであると感じた。学校や学級にいる大人を信頼できることは、幼児期に園や家庭での関わりの中で身に付けた力があるからできることであると考え。また、このような関係性を持たせたことで、児童の学習の中での関わり方もより良い方向につなげていくことができていた。

また、共通点として、幼児期においても、小学校教育においても、「子どもの主体性」を大切にしていることが分かった。幼小接続において、各学校段階間の段差を滑らかにし、子どもの学校適応に働きかけを促していくことも大切である。しかし差異に目を向けるだけでなく、今回の観察でみられたような共通点のように、子どもとの関わり方を強化していくことは、幼小接続期に限らない接続の在り方をより良くする要素になると考える。

5. 課題

幼児期に子どもがどのような遊びを展開し、そこから何を身に付けているのかということを具体的にみていくことができた。合わせて、観察を通して小学校との違いや共通点もみていくことができた。しかし、子どもの実態把握をした上での授業開発を行うことまで進めることができなかったため、今後は、幼児期と児童期、相互の教育を尊重した幼小接続カリキュラムの実践についても考えていきたい。

また近年は、特別支援教育の観点からも幼小連携・接続が注目されている。障害のある子どもたちには、どのような幼小接続を図っていかなければいけないのかということを具体的にみていき、すべての子どもの学びを保障できるように努めていきたい。

謝辞

今回研究をすすめるにあたり、幼稚園、小学校の先生方にご協力、ご助言いただきました。この場を借りて感謝を申し上げます。

引用文献

- ・浅川繭子（2009） 子どもと保育者がともに主体である保育についての検討：-自由保育と一斉保育の比較から 植草学園短期大学紀要, **10**,pp.67-78.
- ・福元真由美（2014） 幼小接続カリキュラムの動向と課題—教育政策における2つのアプローチ—, 教育学研究,81,pp.396-407
- ・加納誠司（2017） 幼小の連携・接続における生活科の果たす役割と可能性 教職キャリアセンター紀要, **2**,pp.9-16
- ・加藤美帆・高濱裕子ほか（2011） 幼稚園・保育所・小学校連携の課題とは何か. お茶の水女子大学人文科学研究, **7**,pp.87-98.
- ・工藤ゆかり（2016） 幼児の遊びの充実と保育者の援助. 帯广大谷短期大学紀要,**53**,pp.19-25
- ・文部科学省（2017） 幼稚園教育要領
- ・文部科学省（2010） 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）
- ・中西さやか（2012） 幼年期カリキュラムにおける「学びの連続性」に関する検討 広島大学大学院研究科紀要 第三部, **61**, pp.215—221
- ・お茶の水女子大学子ども発達研究センター（2005） 幼児教育と小学校教育をつなぐ—幼小連携の現状と課題—.
- ・佐賀市教育委員会幼保小の接続を考える会（2011） 『「えがお」「わくわく」』第7版
- ・白神敬介・周東和好（2017） 幼児期に求められる指導内容についての保育者と小学校教員の考えの相違 上智教育大学研究紀要, **37**,pp.49-55
- ・白川佳子・東ゆかりほか（2009） 幼小連携のカリキュラムについての考察—小学1年生の「体育」「音楽」の授業観察を通して—, 鎌倉女子大学紀要, **16**, pp.51-63
- ・『初等教育資料』（2016） 12月号 p.3
- ・角谷詩織・井上久祥（2015） 小学1年生が積極的に取り組む授業の特性. 上越教育大学研究紀要, **34**,pp.101-110
- ・飛田隆（2015） 幼稚園教育における課題保育と自由保育の一考察. 茨城キリスト教大学紀要,**49**, pp.111-122
- ・富崎望（1979） 我が国の幼稚園における自由保育の発展（児童科学編）. 中村学園研究紀要, **12**,pp.65-74
- ・坪能克弘・坪能由紀子ほか（2013） 『音楽づくりの授業アイデア集 音楽をつくる・音楽を聴く』音楽之友社
- ・渡辺恵子ほか（2017） 幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究（報告書）. 国立教育政策研究所

(2018年2月16日 受理)